

## 獅子舞について



ここでは私の住んでいる富山県黒部市杓掛（くっかけ）地区の獅子舞についてお知らせします。

富山県下新川地方で古いのは入善町・新屋（あらや）地区の獅子舞で、350年程前に越後から伝えられたという。杓掛の獅子舞は新屋の流れをくむともいわれ、明治元年頃入善は青木地区の「タメサ」という人が当時、川添ヤソ氏や角井菊次郎氏ら数十人の若者衆（今の青年団）に伝承したといわれることから、新屋から青木を経て杓掛に伝えられたとみられる。

その踊りの形体は、富山県は下新川獅子舞の流れを組んでおり、魚津市、黒部市、宇奈月町、入善町、朝日町には40～45ぐらいの集落にあるそうである。しかし、現在集落によって毎年一度とか数年に一度、また何か行事があったときなどまちまちである。一般的に数十年前まではいたるところに獅子舞は存在していたが、過疎化現象、青年の数の減少・意欲の減少や経済的費用の増大など実施している集落は少ないのが実態である。

朝日町 笹川、境・大平、五箇庄、平和

入善町 櫛山、神林、小摺戸、青島、新屋、上野、下上野、田中

宇奈月町 下立、内山、音沢、浦山

黒部市 杓掛、立野、山田新、布施山、中村、荒俣、朴谷

明治・大正・昭和初期の練習風景は、若者衆（16～25才）が家々の納屋や神社にて夜遅くまでしたそうである。当時は30～50名ぐらいの若者は元気が良く、床板をぶち抜いたり、失敗すると叩く、殴るの荒い練習だった。当初9月末頃祭りがあったそうであるが、稲作の為、10月末頃になったものである。

また児童たちが獅子舞へ仲間入りしたのは昭和10年で当時の尋常小学校4～6年を対象とし今日に至っている。

川添ヤリ、角井菊次郎らに次ぐのが中村岩次郎、中村文次郎らで当時の天狗、獅子の舞

いはまるで生きているようで本当に手に汗を握ったものだ。またこの二人は明治中期30～32年頃黒部市荒俣へ伝承に行ったそうである。

また杓掛から北海道へ移住した人たちの中にも獅子舞が忘れられなくて、根室市瑛瑠瑠（ごようまい）に住む中村源三郎氏らが、大正時代に歯舞地区にお寺が建てられた時、故郷の獅子舞を奉納したのを契機に今も伝えられ、今は根室市の無形文化財に指定されている。

杓掛集落の獅子舞において最初に習った舞は5種類とつたえられるが、その後村人たちがいろいろとあみだして、26種類にもなっている。

#### 杓掛獅子舞の形体

番号	踊名	笛名	人員	備考
1	ひんぐり	代神楽	4名	
2	神楽	〃	〃	
3	受太刀	〃	〃	
4	四つかずき	〃	〃	
5	天下り（8人サクル）	〃	8名	
6	傘踊り	にぐり	4名	
7	刀にぐり	〃	〃	
8	傘相踊り	相踊り	〃	
9	相踊り	〃	〃	
10	もちまき	もちまき	〃	
11	天狗角刀	桜笛	〃	
12	長棒	〃	〃	
13	舟越し	〃	〃	
14	六人の長棒	〃	6名	
15	3人のにぐり	にぐり	3名	天狗1、踊り手2、獅子1
16	くだんの踊り	くだんの笛	10名	
17	天秤棒踊り	桜笛	4名	天狗3、獅子1
18	玉取り	代神楽	2名	
19	酒樽取合い	草神楽	〃	
20	樽かずき	〃	〃	
21	二人の猩々	猩々	3名	獅子1、天狗2
22	のりうち	のりうち	制限無	小天狗1、大天狗1、獅子1
23	三人の猩々	猩々	3名	天狗3、獅子1
24	町廻り	のりうち、町廻り	制限無	
25	さくる	代神楽	4名	
26	乱丸	乱丸	〃	上州で習った

現在、杓掛集落では「神楽祭」と呼び、秋の実りを祝い悪霊除凶し、家庭の繁栄と集落の発展を祈って毎年9月第4土、日曜日に行われます。その形体は神輿を壮年がかつぎ、小学生、青年団の若者が杓掛集落内約200軒もの家々を夜遅くまで2日間踊り回る文字

通り村あげての楽しい行事です。

この獅子舞の人気者に「面だら」とか「がんねん」と言われる願念坊主がいる。ボロ衣をまとい、竹籠から作られた仮面をかぶり、すり切れた竹箒を持って乱舞する。常に神輿と獅子舞の先頭を歩いて、踊り場の整理や交通整理をするなど、なくてはならない存在である。また秋田の生はげのように子供達を脅かす役目を持っている。この願念は岩戸神楽の流れをくむとも言われ、また僧兵をかたどったもので、横暴を極めた僧兵に対する農民の恨みを風刺したものでないのかとも言われる。

今まで小学生4～6年の男子が踊っていたのですが、女子も踊りに参加するようになり、更に中学生になっても祭りの練習に参加するようになった。地区に住んでいる青年が獅子舞に参加しないなかで、重要な役割を果たしていると思われる。将来彼ら彼女らが後継者となることを切に祈る。

杓掛獅子舞保存会資料より

